

医療や教育分野で連携

アジアきっての親日国モンゴル。実は岡山とのつながりが深く、医療や教育分野で連携を広げている。この夏、首都ウランバートルにゆかりのモンゴル人を訪ねた。

(稲垣心也)

岡山ゆかりの人 モンゴルに訪ね

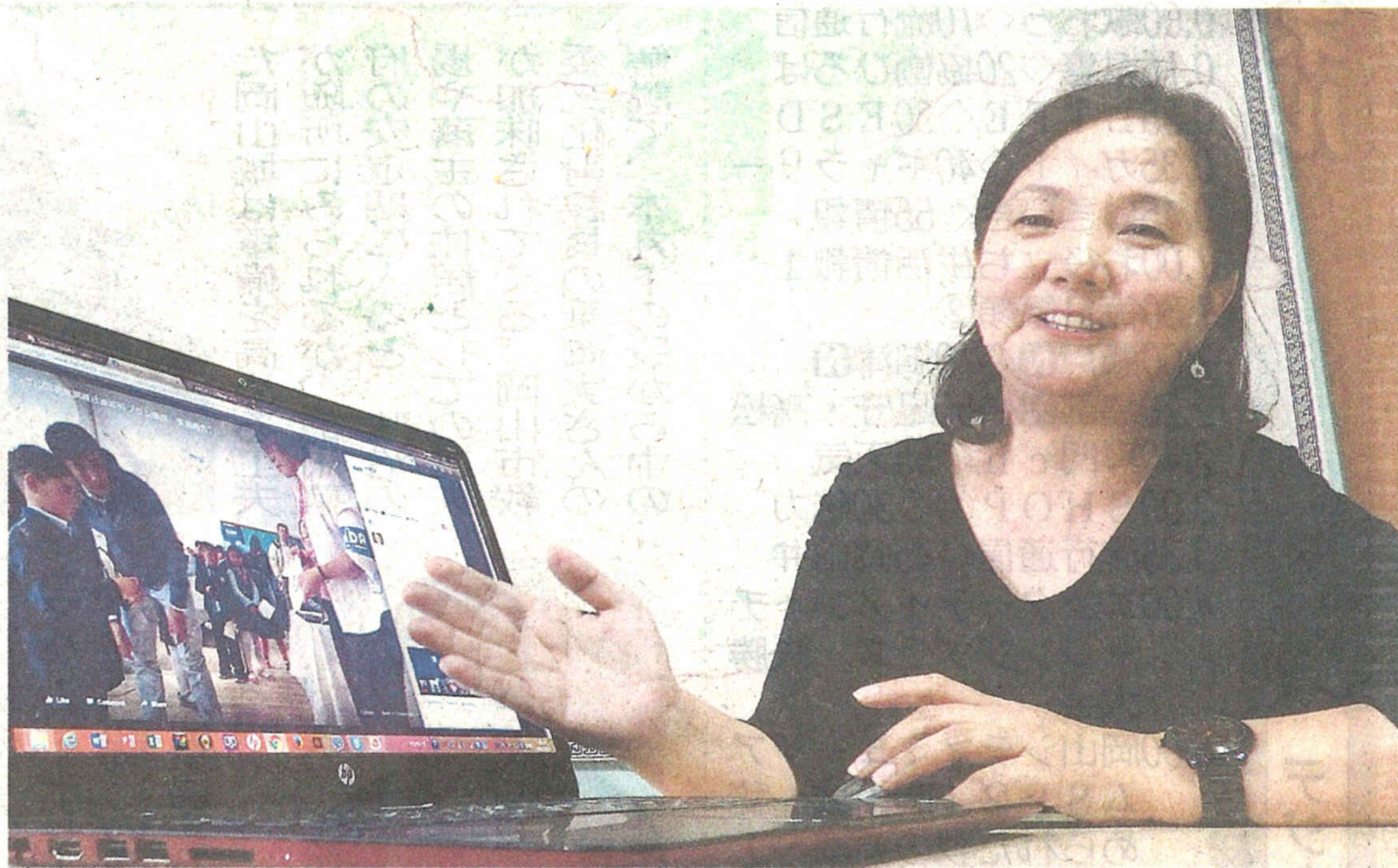
AMDA国際ナショナル参与・ニンジンさん

支援は心も癒やす

岡山市に本部を置く国際医療ボランティアAMDA。その国際組織AMDA国際ナショナル参与のニンジンさん(50)は、モンゴル支部と本部のパイプ役を担う。日蒙国交樹立(1972年)以前に日本のラジオ電波を拾い、収監されたこともあるという親日家の父の影響を受け、独学で日本語をマスター。2006年に訪蒙した菅波茂グループ代表の通訳をしたことがきっかけで活動に加わった。

日本が「敵国」だった時代の空気を覚えており、「負の歴史を乗り越え真の友好を」と願う。「医療と魂のプログラム」の一環で毎年行う平和祈願祭は旧日本軍とソ連・モンゴル軍が衝突したノモンハン事件(1939年)の戦没者を慰霊。「AMDAの支援はモンゴル人の心も癒やしている」

モンゴルは乾燥した気候とゴビの砂ぼこりの影響に加え、大量に石炭燃料を使用するため大気汚染がひどく、眼科疾患が多い。AMDAは同事件の元兵士に対する無償の白内障手術、視力検査の啓発なども進めてきた。9月には子どもの眼科検診が制度化されることとが決定。「国を動かす取り組みに携われたことが誇りと喜ぶ。」



「隣の人を助ける、そんなネットワークを広げたい」と語るニンジンさん

職業訓練学校校長・ガンゾリグさん 指導員・エンフマンダハさん

視覚障害者に勇気



訓練学校の教室で「障害者が活躍できる国にしたい」と夢を語り合うエンフマンダハさん(左)とガンゾリグさん

ウランバートル郊外にある視覚障害者の職業訓練学校は、元岡山県立岡山盲学校教頭の竹内昌彦さんらの支援で2011年に開校した。校長のガンゾリグさん(40)は「障害があっても精いっぱい生きていきたい」と、勇気をくれた」と感謝する。

先天性の視覚障害を持つガンゾリグさんは、開校準備で何度も来岡し、点字ブロックの多さなどバリアフリーの充実に驚いたという。「訓練学校を拠点に、モンゴルでも目の見えない人が引きこもらず、自立し暮らせる社会をつくりたい」。今秋に校舎を改築し、受け入れ人数も増やす予定という。

同校の指導員として今春から勤務するエンフマンダハさん(28)は6歳の頃、ブランコから落ちた衝撃で網膜はく離を起こし、正しい手術を受けられず全盲となった。転機になったのは日本留学。13年にあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の日本の国家資格を取得した。

今では、手術を担当した医師もマッサージを受けに訪ねて来る。「彼はミスを認め、私は恨んでいない。日本でたくさんのお会いがあって、こうして人生に満足しているんだから」と笑顔を輝かせた。

留学を橋渡しする会社設立・デルゲルマーさん

日本語の基礎指導

モンゴル人の留学先の国別ランキングは、隣接するロシア、中国を抑え日本がトップに立つ。「勤勉さ、気配り、マナーなど、見習うべきことがたくさんあった」と、1999年に岡山大経済学部で学んだデルゲルマーさん(38)。日本への信頼を口にする。

帰国後、モンゴル日本センターで企業経営を学んだデルゲルマーさんは、3年前に日本留学を橋渡しする会社を設立。留学希望者に自社の講座で日本語の基礎を習得してもらい、これまでに約70人を送り出してきた。「言葉の壁をなくしてあげ、留学後のフォローもする。顧客サービスに妥協しない姿勢は、日本企業に教わった」と胸を張る。

「教える」には岡山への留学を勧めているという。「私にとって初めての日本が岡山。街並みが美しく自然も多い。モンゴルの今の若者たちもきっと、気に入ってくれるわ」

岡山理科大がモンゴルの研究機関と協力して行うゴビ砂漠での恐竜化石発掘など、学術分野での交流も深まっている。2700キロ離れた草原の国で「OKAYAMA」を確かに感じた。



デルゲルマーさんは「多くのモンゴルの若者に日本で学ぶチャンスを提供したい」と話す